



# ごあいさつ

## 田中芳男没後100年記念企画展開催にあたって

東京農業大学の前身、大日本農会附属私立東京高等農学校の初代校長である田中芳男没後100年の節目の年に「田中芳男と東京農業大学—博物学から近代農学へ—」をテーマとして企画展を開催いたします。

東京農業大学は、125年前の明治24年に徳川育英会によって東京市麴町区飯田町に育英農科として誕生しました。育英農科は、農主に育英会会長の榎本武揚が自ら当たり、農長永持明德、教頭真野肇とした旧幕臣の布陣をもって誕生したのです。しかしその経営は安定的なものではなく、東京農学校として独立し東京市小石川区大塚窪町に移転するも経営的に困窮し、榎本武揚は明治30年に経営を大日本農会に譲ったのです。大日本農会附属東京農学校は、大日本農会幹事の小笠原金吾が設立代表、横井時敬が校長代理として校地を東京府渋谷村常盤松御料地へ移転し、実学教育をさらに高めた総合的な農学教育を推進していくこととなりました。明治34年農学校の教育をさらに高度なものへと変革するため大日本農会附属私立東京高等農学校と改称、翌明治35年3月大日本農会幹事長であった田中芳男を初代校長に迎えたのです。明治36年3月に専門学校令が公布されると同年8月には同令による学校として認可を受けました。校長であった田中芳男と教頭の横井時敬は車の両輪のごとく、学校の研究と教育を大きく発展させるためお互いの力を尽くしたのです。明治40年1月に田中芳男は校長を辞任し横井時敬がその後を担いましたが、東京高等農学校が東京農業大学へと発展する基盤づくりに貢献した田中芳男に、農学者としての学識とともに卓越した人間力があつたことを我々はこの企画展において再認識することができるでしょう。

現在、東京農業大学「食と農」の博物館には、各種標本資料が収蔵されていますが、明治37年田中芳男が設置した東京高等農学校標本室から引き継がれたものではありません。田中芳男が収蔵した各種標本は、第2次世界大戦によって焼失してしまいましたが、世界の農業と農学分野の研究および教育の大きな拠点でもある東京農業大学の農業博物史を財産とする考えは、田中芳男より脈々と継承されたものであると考えています。

近代農学の発展は、「温故知新」のころを先端的な研究者が持ち続け、歴史や博物学によって収蔵・整理された情報を新たな科学の視点から紐解くことで実学研究の大きな発展に繋がると考えています。

東京農業大学の2人の学祖である榎本武揚と横井時敬、そして田中芳男という偉大な我々が先達に敬意を表すとともに、歴史を検証し、更なる東京農業大学の発展につながる展示となることを期待します。

最後になりますが、本企画展にご協力いただきました多くの関係者の皆様に心からお礼申し上げます。

東京農業大学「食と農」の博物館  
館長 江口 文陽

平成28年10月12日

# 1、『虫捕御用』何ゆえ、 東京高等農学校の初代校長

ときは慶応2年(1866)、京都では薩長をはじめとした倒幕勤皇の志士たちと新撰組の闘争が絶えない、風雲急を告げる時代であった。そんな中、関東の山野で昆虫採集に勤しむ数人の若い侍たちがいた。その中心人物こそ「虫捕御用」たる、東京高等農学校初代校長の田中芳男(図1)である。

その昆虫採集とは、幕府にフランス皇帝ナポレオン3世からパリ万国博覧会への参加要請があり、同国の生物学者から日本産昆虫標本の出品の依頼を受けた為であった。同年12月、田中は昆虫標本を携え横浜からパリ万博へ向かった。これが自身の生涯と、日本の近代化に大きな影響を及ぼすことになる。

慶応3年(1867)10月、帰国した田中は明治維新に直面するが、これが田中を新たに飛躍させることとなった。パリ万博の経験から新政府に登用された田中は、官僚となり博覧会開催や博物館創設に関わり、殖産興業の発展に大きく貢献した。旧幕臣として新政府で重用される傍ら、田中は農大の源流ともなる徳川育英会育英黌農業科を創設した榎本武揚との交流を持つ。榎本が“ダイコン”を田中に贈っていたという逸話もある。また、近代農学・農業教育発祥の地ともされる駒場の農学校(現東京大学農学部)開設に参画し重要な役割を果たす一方、同校の卒業生で後に農大初代学長となる横井時敬と出会う。この2人と田中との関係は、育英黌農業科が大日本農会傘下の東京農学校から東京高等農学校へ、更に東京農業大学誕生に至るまでの礎となる。

田中が農大史に登場するのはその高等農学校時代の僅か5年間である。それ故、学祖の榎本と初代学長の横井と比べ、田中に関する資料が余

りにも少なく、彼の業績は殆ど知られていない。むしろ謎が多いのである。

その5年間の意味とは、田中にとって何だったのだろうか。田中は65歳、当時としては晩年にもあたるだろう。

何ゆえ、東京高等農学校の校長を引き受けたのか。ただ単に、大日本農会幹事長としてその経営を榎本から託されたからであろうか。むしろ「虫捕御用」で始まったパリ万博の経験から、我が国初の内国勸業博覧会開催や博物館創設、殖産興業に関わる中、田中の博物学と近代農学に対する思いが、彼を農学校に惹き寄せたのではなかったのか。そして当時、高等農学校の校長代理だった横井は、初代校長として招聘した田中に何を求めようとしたのか。

本展は、田中芳男没後100年にあたる節目の年にあたって、その偉業を紹介するとともに、知られざる田中芳男と東京農業大学の関わりについて探り、考える企画展である。田中が生涯にわたり関わってきた博物学、そして幕末から明治にかけて、我が国の近代農学が芽生えていく過程をとおして、残されている僅かな資料を手掛かりに探ってみたい。



図1 田中芳男の肖像・パリにて撮影  
(東京大学総合図書館)

## 2、「日本の博物館の父」田中芳男とは

博物館に関わる者で「日本の博物館の父」と呼ばれる田中芳男を知らない人はいないだろう。だが、それだけで田中のすべてを語りきれものではない。田中が幕末から明治にかけて関わった分野は余りにも広い。本草学にはじまり博物学、農学、林学、水産学、化学、外国語などの学問分野と農業教育、博覧会開催による殖産興業の推進、大日本農会、大日本山林会、大日本水産会の設立に尽力して、各会の幹事長・会頭を歴任し、我が国の農林水産業に貢献した人物である。旧幕臣でありながら元老院議員や貴族院議員となり、勲一等瑞宝章を受章し、男爵にまで登り詰めた。

一口では語れない多彩な経歴を持つ田中が、高等農学校に関わるのは晩年の頃であるだけに、彼にとって、それは生涯の集大成とも思えてくる。まず、田中の生涯を決定付けた生い立ちから、彼が活躍した若い時代を簡単に紹介してみよう。

天保9年(1838)、現在の長野県飯田市に生まれた田中は、医者であった父や兄について蘭学・医学を学んだ。このことが後の彼の生涯に大きな影響を与えたことは間違いないだろう。安政3年(1856)19歳のとき名古屋へ遊学し、翌年、尾張洋学の伊藤圭介(図2)の門人となる。伊藤はシーボルトに直接教えを受け、我が国初の理学博士にもなった人物である。田中はその伊藤から本格的に医学や蘭学、本草学を学ぶことになる。世は長い鎖国から目覚めたばかりで、外国から様々なものが入ってくる時代だった。その調査・研究の為、伊藤は幕命により出府、田中もそれに随行し、幕府の教育機関の中でも重要な位置を占めた洋学研究の蕃書調所、後の開成所で舶来植物の調査と試験栽培を行った。とりわけ近代農学の萌芽とも思える我が国でのリンゴの接ぎ木を初めて試み、主要果実に育てるきつ

けを作った。今日では日常的に目にするキャベツ、ハクサイ、オリーブ、チューリップなども、田中が試作し日本に紹介したものである。さらには洋書の物産関係用語の和訳や植物学、動物学の洋書の翻訳と校閲に従事し、博物図等の収集や制作をさせている。正に田中は博物学者、また農学者としても当時、最先端の調査研究に取り組んでいたのである。

その頃、田中は伊藤に連れられ、横浜に滞在していた博物学者シーボルトを訪ねている。このとき田中は、どのような思いで面会したのだろうか。本草学や物産収集に情熱を注いできた田中にとって、その出会いは如何なるものだったのか、想像するだけで興味深い。伊藤は僅か1年半で名古屋に戻った為、田中は開成所物産方の中心となって勤めることとなる。

田中の生涯に最も大きな影響を与えたのは慶応3年(1867)パリ万博(図3)派遣である。我が国初の西洋式の昆虫標本56箱を作り、多くの出品物の輸送と展示を幕府に任されての渡仏だった。パリで見た博覧会をはじめ自然史博物館や動植物園であるジャルダン・デ・プラント(Jardin des Plantes)は彼の理想となり、後の新政府のもとでは、そこでの見聞が大きく開花していくのである。



図2 伊藤圭介(1803~1901)  
(名古屋市東山植物園蔵)



図3 パリ万国博覧会通行証(東京大学総合図書館蔵)

### 3、博覧会と博物館への取り組み

パリ万博から帰国した田中は、明治元年(1868)6月、新政府に登用される。江戸城開城から2ヶ月後のことである。そして我が国初の理系高等教育施設「<sup>せいみきよく</sup>舎密局」の創設の為、大阪に出向する。田中は、舎密局を動植物園のある博物館として作る構想を持っていたが実現することなく、政府の呼び出しで帰京し幕府の蕃書調所から度々改称してきた大学南校物産局の勤務となる。ここでは博物図の収集や、その制作(図4)を積極的に進める傍ら、明治4年(1871)、九段坂上の東京招魂社附属地内で日本の博覧会の始まりである「物産会」を開催した。このとき個人では田中の出品が最も多く、開催への思いを感じることができる。

政府も博覧会に関心を示し、田中は翌年の明治5年(1872)3月、文部省博物館の名で現在の文京区の湯島聖堂で文部省博覧会を開催し、これが常設の展示となり、東京国立博物館の源流となった。同年には、国立国会図書館の源流の一つともなった日本初の公共図書館、<sup>しよじやくかん</sup>書籍館が市川清流らの建白に基づき湯島聖堂隣の講堂に設置された。明治15年(1882)には博物館が上野公園に移転開館し、その附属施設として現在の上

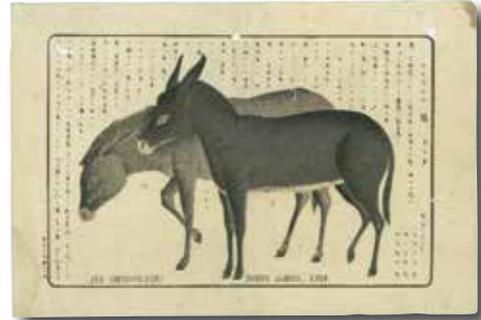


図4 ウサギウマ 驢 蒙古産 動物図集  
武田昌次 記 中島仰山 画 田中芳男 校  
明治9年(1876) (農大芸術情報課程蔵)

野動物園の源流となる動物園が誕生した。

一方、パリ万博への参加以来、田中は新政府になっても、明治6年(1873)のウィーン万博と明治9年(1876)のフィラデルフィア万博に事務官として派遣されている。政府は殖産興業を柱とする近代化を推し進める為、先進国から技術や学問を取り入れる一方で、日本の産業や文化を海外へ紹介する必要があった。田中にとって博覧会への関わりは、一般民衆に広くモノを見せるという所謂、展示を広く実践する機会ともなった。

政府は我が国での博覧会開催を積極的に行う為、明治10年(1877)、第1回内国勸業博覧会を上野公園で開催した。このとき田中は事務から審査まで務め、後の博覧会開催にも絶えず関わり、重要な役割を果たした。明治23年(1890)、第3回内国勸業博覧会(図5)では、「塩水撰種法」を発見した横井時敬が2等協賛賞を受賞しており、そのときの審査部長は田中であつた。榎本武揚が育英農科を創設する1年前のことである。

ちなみに「塩水撰種法」は今日でも用いられている画期的な農業技術であることから、近代農学者の最初の成果として讃えられている。



図5 第3回内国勸業博覧会 明治23年(1890) (農大図書館大学史資料室蔵)

## 4、経営者・校長としての始まり

繰り返すが、田中が農大史に登場するのは、徳川育英会育英黌農業科から大日本農会附属となる東京農学校を経て、東京高等農学校へと発展して行く僅かな期間である。

明治24年(1891)、現在のJR飯田橋駅の敷地内に榎本武揚によって同農業科が開校されたが、農場実習地がないことから明治25年(1892)、大塚窪町に移転した。これを機会に育英黌から独立して東京農学校と改称したが思うように生徒は集まらず、経営的にも大変な時期であった。黌主の榎本が「廃校も覚悟した程だ」と農大史ではよく語られる。このとき農学校教員で、また経営の評議員であった横井時敬は強く存続を望み、榎本は経営を大日本農会へ委譲することになった。

大日本農会は明治14年(1881)4月5日、農業の改良進歩をはかる目的で設立された団体だが、もとより学校を経営する資金的な余裕はなく、横井はそれを承知で経営をお願いしたとされている。明治30年(1897)1月16日、榎本は一切の経営から離れ、東京農学校は同会の傘下に入り、幹事の小笠原金吾が設立代表となり、横井が教頭で校長代理となった。そして校舎増築に取り掛かろうとしていた矢先、同年9月9日の夜半の暴風雨で校舎倒壊という悲運に見舞われる。横井は大日本農会幹部に諮り、かつて皇居御造営事務副総裁を務めた榎本武揚と、同じく御料局長だった同会初代幹事長の品川弥二郎の助力を得て、渋谷村常盤松御料地の一部を校地として借用することにした。この敷地での校舎は、大学として発展する終戦まで続くのである。

田中芳男がその農学校と関わり始めるのは、同会幹事長に3度目の再任となった明治33年(1900)であり、高等農学校と改称される前年のことだ。同会に資金的な余裕がなかっただけに、廃校同然の学校経営を任され、田中の胸中は如

何ほどだったのか。同年7月3日、幹事長の田中は学校のトップとして卒業證書受与式で以下のように式辞を述べている。その内容からは、学校経営に対する不安は一切感じられず、むしろ当時の国内外の農業事情を反映してか、卒業生に期待する力強い思いが窺える。

本日茲(ここ)に我東京農学校卒業証書授与の式を挙ぐ農業振興の気運今漸(ようや)く盛なり。洵(まこと)に国家の為に之を慶祝す。然るに顧て一方を觀れば我農業は外国貿易の影響を被ふり物価平衡の理勢に驅られて既に劣敗の跡を現し或は衰頽に傾けるの農業少なからずして今より農業の生産は専ら国家的經濟の講究を要し其他又方法の改善、品種の撰擇等考査甄覈(けんかく)すべきの事項益々多からんとす

諸子刻苦勉学茲に卒業の榮を荷ひ是より社会に出て、農業の實際に当り大に用ふることあらむとす。乃ち其業務上に於ける攻査驗究すへきの事項や実に鮮少なからざるへし。諸子今日を以て足れりとせず講習研磨弥々(いよいよ)務め是等の攻究を以て畢生の業務とし覚悟従事せられむことを望む。茲に祝詞に併せて一言所思を述ふる事爾(しか)り

明治三十三年七月三日

大日本農会幹事長從三位勲二等 田中 芳男

東京農学校は、明治34年(1901)7月15日文部省の認可を得て、大日本農会附属私立東京高等農学校と改称し、これにより生徒数は次第に増え100名に達して、経営もやや苦境を脱した。このときの田中の経営手腕は明らかではないが、官僚として数々の要職をつとめる一方で現職の貴族院議員でもあり、さらには駒場農学校を開設した経験から、学校経営での存在感を改めて語るまでもないだろう。それは、大日本農会との関係をより密接なものとする為、明治35年(1902)3月15日、田中が初代校長として招聘さ

れたことから窺い知れる。学校経営だけではなく、校長として農業教育の第一線で活躍するのである。駒場農学校開校から24年後、2度目の農学校との縁であり、田中は既に65歳となっていた。担当した科目は倫理だった。

横井は榎本の招聘で東京農学校の評議員として、また同会附属となってからは、教頭・校長代理として学校運営に関わってきた。本来であれば校長であっても決して不思議ではなかった。当時、横井は東京帝国農科大学の教授でもあり、校長となることを避けていたともされる。だが、それは、いずれ田中を高等農学校初代校長として招聘するためだったのかとも解せる。

横井は、明治16年(1883)6月23日、駒場農学校の第2回学位授与式において、農商務卿西郷従道と共に、農務局長としての田中芳男の名が入った学位記を授かり、また前にも述べたが、第3回内国勸業博覧会において、審査部長だった田中から『塩水撰種法』2等協賛賞を受賞している。そして大正4年(1915)田中が男爵の爵位が

授けられたとき、横井は田中の授爵祝賀会において大日本農会副会頭として、また農大学長として祝辞を述べることになる。こうした田中との関係をとおして、横井は、学者としての田中に尊敬の念を抱いていたのではなかったのか。単に学校経営だけではなく、教育現場においても田中を必要としたのではないだろうか。実際に、田中が学校経営に関わったことで生徒数も増え、高等農学校は大きく変わろうとしていた。

標本室の設置をはじめ農場は拡大され、養蚕舎、温室、農具舎、堆肥舎などの施設が充実されていった。そして、新校舎の落成である。廃校寸前で学校経営が大日本農会に移った明治33年から39年までの、僅か数年での急激な改革となった。経営者であり、また校長である田中が如何にその土台作り貢献していたかが想像できよう。それを支えたのが教頭の横井であった。二人が深い絆で結ばれていたからこそ、成し得た改革だったと思えるのである。

## 5、標本室の誕生

田中芳男が東京高等農学校初代校長となる10年程前、伊勢神宮神苑の整備とその拡張を目的とする団体「神苑会」から農業館建設の依頼があり、このとき「自分が理想とする農業博物館を創らせてくれるなら」と、その建設委員長を引き受けたのである。田中は殖産興業に役立つことを理想に、私費を投じてまで資料の収集を行い、自ら展示・解説をも行っている。殊に農業については理解し易くする為に、おしえがき 函解による教草やかけず 掛図、また模型や標本を用い、最新の農業知識や技術、近代農法を解り易い展示で、農民をはじめ広く一般への啓蒙普及に役立てた。今日の博物館で広く行われている展示のかたちを田中が



図6 佐々木祐太郎への謝状 明治35年(1902)  
(農大図書館大学史資料室蔵)

作ったと言ってもよい。パリ万博を経験し、我が国最初の博物館創設に関わった田中が「日本の博物館の父」と呼ばれる所以である。

そして明治37年(1904)、高等農学校では教授

上の参考にする目的で、大日本農会所蔵の標本類を新校舎の広間に陳列した。所謂、これが現在の「食と農」の博物館の源流となる標本室である。国内の私立大学で最も古い大学博物館とされている。

この様に博物館作りに情熱を注いできた田中は実際の教育現場における標本の重要性を当然、認識していただろうし、また信念を持って神苑会の農業館建設に取り組んできただけに、学校運営での標本室設置に積極性を持たない訳はないだろう。田中は、標本の収集と研究を行う博物学、所謂、多くの「モノ」を扱った実学教育の実践を近代農学に導入し、高等農学校に定着させようとした。田中は飯田の少年時代の頃より、幕府の蕃書調所、そして文部省博物局までの間に、西洋の学術書にいち早く接している。また自ら

ウィーン万博から持ち帰った『独逸農事図解』などの近代農学書を翻訳発行し、それが駒場農学校では教科書的な役割を果たしていたとされるだけに、新しい農業教育の必要性を強く感じていたと思われる。

殊に、田中は校長に就任して以降、鉱物標本60点をはじめ、本邦産鉱物及び岩石目録、気候及び土壤論の書籍を寄贈した講師の佐々木祐太郎に対して謝状(図6)を渡しており、横井もまた専門書を寄贈している。他に校舎増築の寄付金を受けていた。資料の寄贈や寄付金を募る活動は、田中にしてみれば当然だったのであろう。校長に就任してから、高等農学校が近代農学に対応すべく、標本室をはじめとする学校整備について精力的に進めていたことが窺えるのだ。

## 6、東京高等農学校と標本室への思い

田中が既に70歳に差し掛かろうとしていた明治39年(1906)、さらに校舎増築があり、このとき、卒業式に合わせて横井をはじめ職員や生徒たちと新校舎の前で、記念撮影(図7)を行った。そして旧校舎階上の講堂が標本室となった。当時の収蔵標本は、農具、家畜、家禽、果実、蔬菜などに関係する21種類、計4,858点とあるが、伊勢の農業館の収集資料、約2万点以上を達成させた田中にしてみれば、充分なものではなかったであろう。田中が『摺拾帖』<sup>くしゅうちよう</sup>と呼ばれる、所謂、現代で言うスクラップブックを生涯に互り作り続けていたことから、収集熱は衰えてはなかったものと推察される。

高等農学校時代の標本室を知る興味深い数枚の写真(図8)が残されている。詳細な年代は明らかではないが、恐らく明治後期から大正の頃で、大学の昇格前だろうか。その写真を観る限り



図7 明治39年(1906)東京高等農学校卒業式記念写真  
校長の田中芳男(中央、右から6番目)と右隣が教頭の横井時敬。  
(農大図書館大学史資料室蔵)

では、多くの標本瓶をはじめニワトリやヒツジの剥製、農具、鉱物、博物画や掛図をはじめ、最新の農業教育を意識してか、西洋式の農具や模型など様々なものが収蔵されているのが分かる。

しかも、当時としては貴重な剥製などの収集が可能だったのは当然、田中のいる大日本農会の支援があったからだ。棚内のニワトリは我が国在来の軍鶏しやもの剥製だろうか。ヒツジ2頭の剥製の品種名は明らかではないが、明治維新を迎え欧米文化の流入と共に毛織物の需要が増大し、政府はヒツジの飼養奨励に力を入れており、そうした時代背景に対応する教材として剥製標本が必要だったのかも知れない。ちなみに明治2年(1869)にアメリカからスパニッシュ・メリノ種を輸入したのを最初に、多くのヒツジが輸入されている。剥製は一見、そのスパニッシュ・メリノ種の角をはじめとする外貌の特徴を有している。収集熱が晩年になっても衰えを見せない田中であつたからこそ、それだけの標本の収集が可能だったのではないかと思えるし、彼の標本室への情熱が伝わってくる。

明治40年(1907)1月23日、田中は校長を辞任。高等農学校を2代校長となる横井に引き継ぎ、大正4年(1915)12月、男爵となる。その半年後、東京、本郷の自宅で亡くなった。享年77歳。

『摺拾帖』には東京農学校開校の募集要項や、高等農学校増築新校舎の写真を載せた抜刷があり、その裏の記事の一部には

「標本の多きは農業学校中にありて殆ど其比を見ずと評せらるゝに至れり」

との一文もあつた。田中が如何に高等農学校に思いを寄せていたかが分かる。

昭和7年(1932)、標本室は東京農業大学図書館附属となり、当時の標本は13,904点に増加した。しかしながら、先の戦災によりその標本すべてが焼失してしまった。その後、世田谷にキャンパスを移転してから収集を再開し、標本室としての名称は、高等農学校から昭和56年に東京農業大学農業資料室として独立するまで使われたのである。



図8 大日本農会附属私立東京高等農学校標本室（農大図書館大学史資料室蔵）

# 7、田中芳男の精神を受け継ぐ

これまで農大の創設については、生みの親が榎本武揚であり、育ての親が横井時敬であるとされ、実学教育の生成と発展はこの2人の功績とみなされ語り継がれてきた。今回、これまで殆ど知られてなかった彼らと田中芳男との関係が浮き彫りになったことで、農大史の実像がさらに明確になり、華を添え厚みを増したことは間違いないであろう。

農大にとって田中を一口で語るとすれば、「農大を救った

と人」とも言えないわけではない。廃校寸前で、学校経営が榎本から大日本農会に移り、田中が高等農学校初代校長に就任したことで、生徒数の増加が見られ、新校舎(図9)ができ、そして標本室が設置されるなど、学校整備の点で格段の充実がみられたのである。

そのような田中の活動を根底から支えた精神とは何であったか。それは、蘭方医であった父のもとで蘭学に親しんだ飯田での少年時代に育まれたものではなかったか。学問は世の中に役立ててこそのものであるという、博物学の精神そのものであったろう。博物学の基本は「モノ」であり、所謂、学術標本(物産標本)を収集し、実際に扱い、役立たせるということである。田中は生涯にわたって標本を収集し、展示し、分かり易く見せるという教育機能を一貫して博物館に求めてきた。つまり田中にしてみれば、資料を実際に触れながら学び、役立てること、それこそが実学であると捉えていたのである。そして、横井もまた、農家の現場をとおして「塩水撰種法」を見出した様に、田中の学問知識と実際の経験<sup>ふえん</sup>を重視する考え方に農学者として共感、敷衍し農大の



図9 明治39年6月頃の東京高等農学校  
写真左は田中芳男。右は富田鐵之助(1835~1916年)。明治30年に東京農学校が大日本農会の経営に委ねられた際、同会幹事長として農学校の経営に尽くした。[東京農業大学開校15年記念帖](大正2年)より。

実学教育(図10)を確立していったのではないだろうか。

今日の農大の「食と農」の博物館や図書館にも、田中の思想を垣間見ることができる。

田中が設置した標本室は、数年後の大学昇格に伴い図書館が設置されその附属機関となった。現代の農大図書館は創設当時から標本室を附属にし、標本(実物資料)、図書、図解(掛図、現在では画像、映像)の3本柱によって情報が成り立つというコンセプトに基づき構想されている。これは両施設が本来、1つの組織として機能しなければならないという田中の理想とする総合博物館の考えが継承されてきたことにほかならない。

田中が関わり収集してきた標本室の標本資料は、戦災でそのすべてを失った。しかし戦後、農大が世田谷に移ると、すぐに標本収集を再開し、30年後には全国から収集した「古農機具類写真目録」を全国に先駆けて刊行した。それは正に、田中の精神が受け継がれ、総合的博物館の機能を達成するための重要な事業として優先的な取り組みがなされたからであろう。

そして、図書館から独立した現在の「食と農」の博物館は、故・近藤典生博士が設立した一般財団法人進化生物学研究所との連携で、同所の施設である「バイオリウム」(生き物空間)と一体で運営に関わっている。これこそ、田中が理想としたジャルダン・デ・プラントとしての理想的な形ではないだろうか。また農学部の厚木キャンパスは、温室をはじめ動物舎、講義棟や研究棟などの施設を含めて、キャンパス全体を植物園として位置づけている。ここは、学生たちが身近に博物学、そして農学に触れることのできる「知」の環境・空間になっており、田中の理想に通じるものであろう。

また、現在の農大には、博物館学芸員と図書館司書の資格を養成する学術情報課程(図11)がある。本課程における教育目的は、全人的な人間形

成を目指し、農学や関連科学にて学んだことを背景に、地域における自然・歴史・文化に関する学術資源の調査・研究・管理などに貢献できる能力を涵養することにある。例年、学芸員や司書の専門職員として、全国の博物館や動植物園、図書館および関連機関に卒業生を送りだしている。田中の目指した博物学や実学教育の精神を踏まえ、農大ならではの教育環境や成果を生かして、情報社会や生涯学習社会に貢献できる人材を養成することこそが、学術情報課程の教育方針である。

田中は現在の農大の姿を見たら、どのように思うだろうか……。

(黒澤弥悦)



図10 大正時代の実習



図11 現代の実習

## 史料紹介

### 農大生たちの「全国農産物展覧会」

田中芳男が東京高等農学校の初代校長を務めた5年間は、期間として決して長くはないが、本学の成長にとって重要な時期にあり、この間に彼が果たした役割は少なくない。

大正5年(1916)、6年前にその名称を東京農業大学と改めた学内において、4月28日、29日の2日間、高等科3年生主催による「全国農産物展覧会」なるイベントが開催された。学生たちは、出品物を集めるにあたって全国を8区に分け、各区に2名ずつ委員を置き、担当地区の出品勧誘・催促に当たった。春季休業中の帰省を利用し、おのおの郷土の農産物を収集したという。また、他学年にも委員を派遣して出品を促したほか、農商務省や大日本農会、種苗肥料農具商、学校関係者に対して出品賛助を仰いだ。農友会会報『農友』第41号(大正5年7月発行)に収められている主催者報告から一部紹介しよう。

…会場は、高三教室を以て之に当て、幔幕漫画(ママ)等を以て装飾し、聊か場の美観を添ゆ。出品物は各方面に亘り総数一千二百四十一一点、学生の主催としては、大成功と云ふも過言に非ざる可し。横井学長の「丸デ本物ダネー」と評せられしは、正に是れを裏書せるものなりと云ふ可し。

主催の学生たちを喜ばせた学長・横井時敬の「まるで本物」という評言には、あるいはかつて自身が審査官として携わったこともある内国勸業博覧会の思い出も含まれていたかもしれない。この展示は、小規模ながらも充実した展覧会になったようだ。まず会場に入ると、農具製作所出品による最新の農具12点が入場者を出迎えた。続いて陳列されたのは、当時日本の“新領土”であった台湾の漆器類で、法経学を教えていた中島信虎の土産という。更に現地の教科書や児童の習字や絵画、統計書類など合わせて144点が並んだ。農産物のコーナーでは講師・学生らが米や野菜、種子、柑橘類、農産物加工品といった国内外の品物を持ち寄って並べ、珍しがった。講師の紹介により農科大学(東大農学部の前身)からの出品も少なくなかったという。

大日本農会や肥料製造会社の出品した土壌・

肥料標本や原鉱石、精製肥料等は品数も多く、その他林産物や各種培養器、農具機械などの陳列は「实际的知識の吸入に資するところ大」であった。有志による課外活動の一環として企画されたこの展覧会は、多くの出品協力者を得て、入場者は2日間で「千数百」に上った。

…場の北側を占有せるは、田中男爵の出品にかかる棕櫚細工(六十八点)にて、此れ実に男〔爵〕の多年苦心収集せられし所、あらゆる棕櫚細工を集めて、余す所なし。ここに同男の棕櫚の歌を記せん。…(以下略)

田中芳男が校長を辞して10年の歳月が経っていたが、学生たちへの協力は惜しまなかったようだ。田中は晩年、棕櫚(シュロ)の研究に注力しており、曰く「棕櫚の効用は甚だ多く、其幹材は古来鐘撞棒(カネツキボウ)に使用するを始めとし、床柱、手摺等の建築用材として又鋸製(ロクロ)として器具、鉢、盆、土瓶敷等を作り得べく、葉も亦種々の用途あり。就中毛に至りては鼻緒(ハナヲ)、箒縄(ハウキナワ)、東把(タワシ)等、日用欠くべからざる必需の品を作製すべし」(大日本山林会編『田中芳男君七六展覧会記念誌』)と、その有用を称えて惜しまず、世に広めようと自ら唱歌まで作っている。当時、大日本農会にて同年10月に予定されていた農産品評会に向けて棕櫚細工の収集を続けており、4月末に行われたこの「全国農産物展覧会」は、その最中に開催されたものである。ところが、6月半ばに神経痛を悪化させた田中は、そのまま帰らぬ人となってしまった。

博覧会を開設し博物館の枠組みを作った田中の目的は、自然物から人工物まで多くのモノを集め人々に見せることで知識を開き、諸産業を発展させることにあった。内国勸業博覧会をはじめ農林水産の各種博覧・共進会を興し、自らの足で全国を回って出品を促し、遊説することは終生に及んだ。殖産興業に尽くし、日本の近代化を進めた田中芳男の博物学者としての最後の仕事だが、この農大で学生が作った「展覧会」にて披露されていたのである。

(村山千尋)

## コラム

### 榎本武揚と田中芳男

榎本武揚(1836-1908)と田中芳男(1838-1916)、彼らはいずれも、旧幕臣の「官僚」として明治政府の国作りに深く携わると同時に、「学者」でもあった。榎本は化学者、田中は博物学者として、国家事業の献策から露地栽培に至るまで、その学識を応用して広く世に活かすことに努めた。育英齋農業科から私立東京高等農学校に至る本学の基礎を築いた2人の校主・校長の接点を示すエピソードを紹介したい。

### 珈琲

我が国ではじめて「<sup>コーヒー</sup>珈琲」の栽培を提唱したのは、榎本武揚である。明治7年(1874)、マラリア治療薬キニーネの原料となるキナ、商品作物として期待されたタバコとともに「物産中ノ<sup>すこぶ</sup>頗大ナル者」として欧州で普及している珈琲を挙げ、早急に国内栽培を始めるよう建議した。翌年、オランダ政府よりジャワ島の珈琲の苗木が送られるも、すぐに枯死してしまっただけらしい。

同年3月に特命全権公使として渡露した榎本に代わり、これを本格的に実施すべく後押ししたのは田中芳男であった。明治11年(1878)1月、田中は、日本領土への編入が正式に認められたばかりの小笠原諸島について、その温暖な気候を活用して熱帯産の有用植物を移植して産業を興そうと、勸農局長松方正義宛てに建議を提出。榎本の案を踏まえてキナ、珈琲の他にコチニール、ゴム、オリーブを候補に挙げるが、いずれも今後の国内需要を見込んだものであった。間もなく勸農局の部下である武田昌次を派遣して苗木の買付けから栽培までを任せ、明治14年(1881)に至って遂に小笠原の国産珈琲は結実する。同17年(1884)に分析試験を行った駒場農学校の化学教師ケルネルの評によると、その味は「嘗テ日本ニ輸入シ来ル所ノ最良品ト<sup>すこし</sup>毫モ異ナル所ナシ」だったという。また、「最必要」とされたキナについては、同じく元部下の田代安定に命じてその栽培に当たらせている。



東京農業大学開校15年記念絵葉書

校舎は常磐松御料地内にあった。常磐松を背景に、左上から田中芳男、榎本武揚、左下に横井時敬、伊庭想太郎の肖像が並ぶ。

### 大根

その交流の経緯についてははっきりしないが、蕃所調所で舶来植物の栽培に取り組んで以来農作物栽培について詳しい田中芳男に対し、榎本武揚は何度か「大根」を贈っている。明治21年(1888)初冬、榎本は実験的に人造肥料(過磷酸石灰)を与えてよく育った大根と、旧来通り人糞で育てた大根を作り、両者の生産量・経費の比較表とともに田中に遣って試食を依頼した。また、明治23年(1890)3月に贈られたという桜島大根は、直径が2尺9寸(≒87.87cm)あったというから、桜島大根の中でも巨大なものだ。田中はその断面を謄写して榎本の手紙とともに軸装し、「桜島大根撮写図幅」として自身の76歳を記念した「七六展覧会」にて展示している。榎本にせよ田中にせよ、学生たちが大根を手を持って踊る「大根踊り」がのちに農大の名物になると思うまい。

(村山千尋)

## 田中芳男 業績

和 暦	主な業績
慶応元年	津田仙とともに白菜、亜麻など輸入作物を栽培試作する。
慶応2年	西洋リンゴ(平果)の接木に成功。各地に広めた。
慶応2年	パリ万国博覧会出品のため、日本ではじめて昆虫標本を作る。
慶応2年	幕吏としてパリ万博に出張する。ホロホロチョウ、サボテン等を持ち帰り、繁殖させる。
明治2年	御用掛としてハラタマとともに大阪で舎密局を建設する。
明治元年	日本ではじめて魚類の剥製(金鯛)を作り、博物標本とする。
明治元年	雑誌『明治月刊』を発行する。
明治5年	湯島聖堂で博覧会を開く。
明治5年	湯島聖堂を博物館にする。物品、図書を献納する。
明治5年	東京都内に街路樹を植えることを建議する。
明治5年～	一目でわかる教材として、博物掛図や教草といった図解を作製する。
明治6年	ウィーン万国博覧会に出張する。
明治8年	オリーブの栽培を行う。
明治15年	上野の山を修理して公園を整備、動物園を設立する。
明治9年	駒場農学校(現東京大学農学部)建設を発案する。
明治8年	『有用植物図説』を編纂する。
明治11年	小笠原諸島を開拓し、武田昌次を派遣してコーヒー樹苗を移植する。
明治9年	フィラデルフィア万国博覧会に派遣される。
明治9年	アメリカで養魚場を視察、帰国後にサケ・マスの人工孵卵を試みる。
明治10年～36年	すべての内国勸業博覧会(全5回)において、審査部長、事務官、評議員として尽力する。
明治11年他	コルク、鶴子果、桜桃、蓮、四季苺の栽培と奨励を行う。
明治11年	土佐の長尾鶏(尾長鶏)を世に広く紹介する。
明治11年	髪菜(はっさい)を用いてところてんを作る。
明治11年他	繭糸、綿糖共進会など諸分野の共進会の会務に携わる。
明治12年	上野公園整備時、日本ではじめて競馬を行う。
明治14年	品川弥二郎ら同志とともに大日本農会を創立し、金若干円を寄付。家鶏の品種、農書及び農産標本を寄贈する。
明治15年	「木材学鑑」(標本)を山林共進会に出品する。
明治15年	大日本水産会、大日本山林会の会務に尽力し、地方の山林会開催を提唱する。
明治16年	水産博覧会を開設する。
明治16年	『大日本農書』の編纂を行う。
明治18年	ソメイヨシノを発見する。
明治18年	大日本織物協会の役員を務める。
明治18年	東京(帝国)学士会院会員となる。
明治21年	品川沖で真珠の放養を行い、のちに志摩に真珠貝の養殖場を作らせる。
明治21年	田中ピワを作出する。
明治22年	日本園芸会の会務に尽力する。
明治24年	神苑会および農業館設立に全力を傾注し完成させる。養蚕人形を作り、養蚕図解を出版する。
明治24年	『有馬温泉誌』を著し宮内省に献上する。
明治25年	人造石(モルタル)、土歴青(アスファルト)を実用化させ、日本ではじめて自邸をコンクリートで建設する。
明治27年	農事上勸奨啓発の功績顕著にして、大日本農会より紫白綬有功彰を受ける。
明治35年	大日本農会附属東京高等農学校の初代校長を務める(～明治40年1月)。
明治35年	日本材木業連合協会会長となり会務を統督する。
明治35年	菓子唱歌を著す。
明治36年	第5回内国勸業博覧会において、植物用大型温室を導入し、冷蔵庫を紹介する。
大正2年	齢76歳を祝い、三会堂にて七六展覧会を開催する。

※みやじましげる(1983年)抜粋、編集

## 主要参考文献

- 青木 豊 「大学付属博物館とは—我が国の大学付属博物館の歴史と展望—」『全博協 研究紀要』第14号  
全国大学博物館学講座協議会 2011年 p13~18
- 飯田市美術博物館編 『日本の博物館の父 田中芳男展』 1999年9月
- 学校法人東京農業大学 『目でみる東京農大百年』 1991年5月
- 学校法人東京農業大学 『東京農業大学百年史 資料編』 1994年12月
- 正田陽一監修 『世界家畜品種事典』東洋書林 2006年1月
- 杉山正司 「田中芳男」『博物館学人物史 上』青木 豊 / 矢島國雄 編 雄山閣 2010年
- 全日本博物館学会編 「博物館学事典」雄山閣 2011年
- 田中義信 『田中芳男十話 田中芳男経歴談』田中芳男を知る会 2000年
- 田中義信 「田中芳男自筆『田中芳男履歴年表』解説と翻刻」飯田市美術博物館研究紀要14号 2004年
- 大日本山林会 『田中芳男君七六展覧会記念誌』 1913年
- 大日本農会 『大日本農会報告』 1880年~
- 大日本農会 『大日本農会百年史』 1980年
- 角山幸洋 『榎本武揚とメキシコ植民移住』同文館出版 1986年
- 戸蒔義次 「東大農学部作物講座始祖田中節三郎小伝」『農業技術』農業技術協会 1997年7月
- 友田清彦 「東京農大初代学長 生誕150年 横井時敬の足跡 日本における近代農学の開拓者」  
『実学ジャーナル』 2010年12月号
- 友田清彦・東京農業大学図書館大学史料室 『生誕150年記念 横井時敬の遺産』東京農業大学出版会 2011年3月
- 友田清彦 「田中芳男と大日本農会」『農業』No.1612 2016年 p12~16
- 南雲清二 「キナの国内栽培に関する史的研究」YAKUGAKU ZASSHI 131 (11) 2011年
- 西尾敏彦 「田中芳男と内藤新宿試験場」『農の技術を拓く』p14~18 創森社 2010年
- 西尾敏彦 「明治農耕文化革命の先導者、田中芳男—没後100年に当たって—」『農業』No.1612 2016年 p6~11
- 農商務省農務局編 『農務顛末』巻1 p852~856 1954年編
- 保科英人 「没後100年 帝国議会における元虫捕御用の田中芳男」『BIOSTORY』vol.25 2016年 p92~100
- 松田藤四郎 『榎本武揚と東京農大』東京農大出版会 2001年
- みやじましげる 『田中芳男傳—なんじゃあもんじゃあ—』田中芳男・義廉顕彰会 1983年6月

## 編集後記

田中芳男の偉業についての調査研究は広く行われており、その記述も多い。しかし、農大との関係について詳細に調べられている資料は殆どない。これまで刊行された農大の記念誌でさえも、僅かな記述のみである。当然、戦災で焼失し、残されている資料が僅かとはいえ、田中の偉業を思えば、未だ知られてない農大での業績もたくさんあるのではないかと考えてくる。

田中芳男没後100年を記念して、田中ゆかりの国立科学博物館と飯田市美術博物館でも企画展を開催した。当館でも充分とは言えないが、今回の企画展で田中と農大の関係について、多少なりとも明らかにすることができたのではないだろうか。これには、多くの専門家や関係機関からの協力で情報を寄せられた。心より感謝申し上げる。

また本誌を纏めるにあたり、色々とお助言を頂いた本学国際食料情報学部の友田清彦教授ならびに教職・学術情報課程の熊澤恵里子教授と那須雅熙教授、そして本展のきっかけを作って頂いた故・内村泰本学名誉教授と当館元副館長の梅室英夫氏に感謝する次第である。

(Y)

## 協力機関

飯田市美術博物館	名古屋市東山動植物園
一般財団法人進化生物学研究所	東京農業大学図書館大学史資料室
東京大学総合図書館	東京農業大学学術情報課程履修学生

企画・共催：東京農業大学「食と農」の博物館・東京農業大学学術情報課程  
企画展示 田中芳男没後100年記念企画展実行委員会  
委員長 上岡美保（「食と農」の博物館副館長）  
委員 黒澤弥悦、安田清孝、西嶋 優、清水健太、大石康代、村山千尋（「食と農」の博物館）  
木村李花子（学術情報課程）  
展示デザイン・製作 STUDIO HOOK 志田定幸

## 展示・催事のお知らせ

### ■企画展示

- ①大日本農會附属私立東京高等農学校初代校長 田中芳男 没後100年記念企画展「田中芳男と東京農業大学—博物学から近代農学へ—」  
【期間】 2016年10月12日(水)～2017年3月12日(日)
- ②「農学2.0」農のこころで社会をデザインする  
【期間】 2016年10月12日(水)～2017年3月12日(日)

### ■常設展示

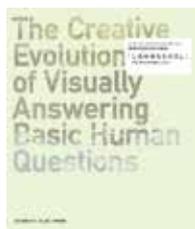
- 【1階展示室】二人の学祖・榎本武揚と横井時敬、東京農業大学の歴史と沿革、クリオネ、トラクター、鈴木梅太郎のオリザニン、二母性マウス「かぐやKAGUYA」、材鑑標本、南禮蔵・麻生昇平リン鉱石コレクション、2015年ミラノ万博に展示の「触れる地球」、CM-BOX、進化生物学研究所コレクション
- 【2階展示室】古民家の再現ジオラマと古農具コレクション、ニワトリの学術標本コレクション、住江金之コレクション(いろいろな酒器と酒に関する風俗資料)、東京農業大学卒業生の蔵元紹介コーナー

## 最新刊行物のお知らせ

### ■記念出版

#### 図録『ピーター・メンツェル&フェイス・ダルージオ 地球の記録20年の軌跡 「しあわせのものさし」—持続可能な地球環境をもとめて—

(内容) 人々の営みに様々な問いかけをもちながら、20年にわたり世界中を旅した報道写真家とあるがままの事実を綿密に記録したジャーナリストでありプロデューサーでもあるパートナーとの壮大なプロジェクトを物語る写真展の図録である。



(判型) A4判変型 横型 並製 88頁  
(企画・編集) 東京農業大学「食と農」の博物館  
(装丁・デザイン) 木村正幸(デザイン工房エスパス)  
(発行) 一般社団法人 東京農業大学出版会 平成28(2016)年6月1日  
(価格) 2,600円+税

#### 『農の暮らしに生きた女わざ』

(内容) その土地特有の自然と共存しながら長い間祖先から受け継いできた生活文化は、名もなき多くの女たちによって守られてきた。女たちが必死に紡いできた生活文化を、とすると顧みられることもなく、当然のように捨てられてきたであろうただの「布」たちが語ってくれる。



(判型) B5判変型 上製 144頁  
(企画・編集) 東京農業大学「食と農」の博物館  
(監修) 森田珪子 修紅短期大学名誉教授、「女わざの会」代表  
(装丁・デザイン) 木村正幸・山本亜希子(デザイン工房エスパス)  
(発行) 一般社団法人 東京農業大学出版会 平成28(2016)年3月10日  
(価格) 2,500円+税

#### 『日本人と馬 —埒を越える十二の対話—』

(内容) 信仰・民俗・歴史・考古・社会・科学・芸術と多分野にわたる識者達による対話が、様々な角度から人と馬の関係性を照らし出す。



(判型) A5判 上製 420頁  
(企画・製作) 東京農業大学「食と農」の博物館、東京農業大学教職・学術情報課程  
(編集) 設立10周年記念特別企画展示実行委員会と「十二の対話」委員会  
(装丁・デザイン) 木村正幸(デザイン工房エスパス)  
(発行) 一般社団法人 東京農業大学出版会 平成27(2015)年3月30日  
(価格) 4,000円+税

#### 『樹木の形の不思議』

東京農業大学短期大学部環境緑地学科・特定非営利法人樹木生態研究会 編  
一般社団法人 東京農業大学出版会 平成26(2014)年3月20日 発行  
A5判 並製 158頁 2,000円+税

#### 『耕す 一鍬と犁』

東京農業大学「食と農」の博物館 編  
一般社団法人 東京農業大学出版会 平成25(2013)年3月30日 発行  
A5判 並製 115頁 1,500円+税